いまいずこ待道講

（まちどうこう）

安産祈願のための女人講

逆井天神（天満宮）の右側にある祠を開くと、格子の裏側に日暮富雄と書かれている。そこの石祠には待道大権現、寛政十二年庚申十一月吉日と彫られている。ご本人の日暮さんに聞いてみると、「あれはうちのお稲荷さんだ」という。二百年もたつうちに待道という信仰は、歳月の霧のなかに隠れてしまったようである。それでも大権現の石祠は日暮家の保護のもとにお稲荷さんと合祀されて現存する。稀有なことにも思える。

この待道大権現は、我孫子、柏、沼南、鎌ヶ谷、流山、野田、取手、松戸という利根川流域にみられる待道講という女人講で、各地に八十近い石祠が残されている。柏市内には十六基の石祠があり、安永五年の宿連寺（須賀社）が一番古く、続くのは花野井（香取社）で、逆井は三番目になるようである。

㊦観音寺に近い信号を右折し、石段を上がると、寂しそうに鎮座した逆井天神が在る。中から真っ黒い菅原道真公の彫像が睨んでいる。その右に小さい祠㊥があり、中に石祠㊦が置かれている。目を凝らせば、ハッキリ待道大権現と読める。横に寛政12年とあるから、200年前の権現様である。

お稲荷さんになった待道大権現

待道講とは何か。子を産む年齢の女性たち信仰された安産祈願の女人講である。我孫子の飯白和子さんは、「待道大権現とマツドッ講」（我孫子市史）で、信仰発生の地を同市岡発戸（おかぼっと）の待道神社としている。そこの玉垣の柱に安永四歳未十二月吉日とあり、起源だとする。

その信仰が早くも宿連寺、花野井に広まり、いまはお稲荷さんになった逆井にも普及したようである。

待ち道、道で待つとはどういう意味なのだろうか。飯白さんは、あるおばあさんの話を収録している。

昔、お腹の大きい嫁と旦那の夫婦者がいた。何かの都合で二人が待ち合わせをした。どこでどうまちがえたのか、嫁の方はここの道の側で待っていて、男の方は印旛沼のほとりで嫁の来るのを待っていた。お腹の大きい嫁はなかなか来ない男をじっと待っていた。その内産気づき、道の端にムシロを敷きそこで赤子を産んで死んでしまった。それで道で待つということから待道といわれるようになった。

「生涯現役ときわ会・郷土史友の会」の藤本吉一さんは、お産の不安と恐怖からぬけでるため、女性の開放慰労のために、信仰が広がったとする。末寺の布教、過酷な労働を癒す骨休め、などをあげている。

←待道大権現（寛政12年11月）